

異文化交流実践を授業へフィードバック

浮葉正親・田中京子

I. 基礎セミナー A (前期)「英語で学ぶ日本文化」(田中京子)〈新規開講〉

1. 授業のねらい

日本文化について学び、伝統文化に実際に触れることによって、自分なりの見解を持ちそれを英語を使用して説明できるようにする。

日本文化といってもその捉え方は様々であるが、この授業では特に、日本の伝統文化として語られることが多い華道、書道、舞踊、着物、折り紙などをとりあげる。その姿や心を学び、専門家の協力を得ながら実際に体験し、理解する。英語を使用しながら、日本文化について自分なりに説明できるようになることをめざす。

2. 受講者及び講師

受講生は文系・理系6学部の1年生12名、留学生、日本人学生、外国で育った日本人学生などであった。TAは学部時代に留学を経験している生命農学研究科1年の家田真理子さんに、また留学生センター相談室スタッフ柴垣さんにも毎回参加してもらった。

3. 授業内容・スケジュール

以下の通りである。

Kiso Seminar 2010 **Japanese Culture in English**

Date and Time: Every Thursday 16:30–18:00 From April 15 to July 22 & Saturday, May 29, Except June 3 (NU Festival)

Place: ECIS 201 (To be announced later for open seminars)

| No. | Date | Content | Special Lecturer |
|-----|-------------------|-------------------------------|-------------------|
| 1 | April 15 | What is the Japanese Culture? | |
| 2 | April 22 | Origami: Introduction | |
| 3 | May 6 | Origami: Practice | Prof. Ikei Keiko |
| 4 | May 13 | Ka-do: Introduction | |
| 5 | May 20 | Ka-do: Practice | Prof. Okada Kakei |
| 6 | May 27 | Buyo: Introduction | |
| 7 | May 29 (Saturday) | Buyo: Practice (Open seminar) | Prof. Zuiho Toyoe |

| | | | |
|----|---------|---|--------------------|
| 8 | June 10 | Kimono: Introduction | |
| 9 | June 17 | Kimono: Practice (Open seminar) | Prof. Kato Katsuko |
| 10 | June 24 | Sho-do: Introduction | |
| 11 | July 1 | Sho-do: Practice | Prof. Fujii Naomi |
| 12 | July 2 | Presentation (Open seminar about Origami) | Students |
| 13 | July 15 | Presentation (Open seminar about Shodo) | Students |
| 14 | July 22 | Presentation (Open seminar) | |
| 15 | July 29 | Summary | |

4. 評価

4-1 ワークショップの授業化

1990年代より行ってきた留学生センターのワークショップの内容を授業化することはかねてからの課題であった。今年度、日本文化に関するワークショップの授業化が実現した。これまでボランティアとして協力してきた専門講師たちにも継続して担当していただき、教養教育院からわずかではあるが講師謝金を支出した。日本人も含めた学部生たちが、新入の留学生と共に実習を経験する、という、理想的な環境を持つことができた。

4-2 英語による授業環境

最初に“World Englishes”の考え方を紹介し、学生たちには、持てる言語運用力を駆使して、場の状況に合わせてコミュニケーションすることを促した。授業中は、一人の教師対学生という関係でなく、スタッフ3名も多様な英語で多様な考え方を分かち合うようにし、学生たちが間違いを恐れず発言できる環境作りを工夫した。TAの家田さんも、海外から見た日本を紹介しつつ、積極的に発言し、学生たちのロールモデルとなってくれた。学生たちの英語習得レベルは、ほとんどが入学試験対策レベルであったが、それをコミュニケーションの中で活用する場を提供できたと考えている。

4-3 公開発表

最後の発表は、学生たちが日本の伝統文化について

調べ、考察したことを、英語で紹介した。公開発表会とし、留学生たちの参加を得て、質問や話し合いも行われた。学部生にとって、大学院レベルの留学生たちを前に発表することは挑戦度が高かったと思われるが、最後には留学生から「とても役にたったので発表原稿を入手したい」という希望も出され、成果を実感することができた。

Ⅱ. 基礎セミナー A (前期) 「韓流ドラマから『パッチギ』まで一日韓比較文化論のすすめ」(浮葉正親)〈新規開講〉

1. 授業のねらい

日本人にとって、韓国は「似ている」ようでどこかが「違う」、ちょっと気になる国である。この授業では、日本人が韓国の社会や文化のどこに違和感を抱くのかを吟味し、韓国という〈鏡〉に映った日本人の自画像を議論していく。また、日本と韓国(朝鮮半島)との歴史的な深い関係についても理解を深め、日本を東アジア漢文化圏のなかに位置付ける、広い視野を獲得するのがこの授業のねらいである。

2. 受講者及び講師

受講生は文系・理系6学部の1年生12名であり、そのうち3名が韓国人留学生であった。TAには、国際言語文化研究科D3の鄭在恩さんをお願いした。講師は浮葉正親、留学生相談室の松浦まち子教授が数回授業に参加した。

3. 授業内容・スケジュール

3-1 スケジュール

- 4/15 オリエンテーション
- 4/22 日本人と韓国人、どこが違うの?
- 5/6 日本人の韓国体験記を読む
- 5/13 激しい受験競争と母の祈り
- 5/20 子どもと向き合う韓国の父親
- 5/27 現代に生きる儒教精神-韓国に嫁いだ日本人花嫁の葛藤
- 6/10 占いと巫俗(シャーマニズム)信仰
- 6/17 在日コリアンと日本社会-映画「パッチギ」とその背景
〈発表グループ分け〉
- 6/24 発表準備

- 7/1 発表準備
- 7/8 発表準備
- 7/15 韓国に関して調べたことを発表する(1)
- 7/22 韓国に関して調べたことを発表する(2)
まとめ

3-2 グループ発表のテーマ

- グループ1: 韓国社会の特徴
- グループ2: 韓国の教育
- グループ3: 韓国の家族
- グループ4: 韓国の学校

4. 評価

日本人学生を主な対象として、韓国や在日コリアンをテーマにした授業をするのは、これが初めての経験であった。そのため、1時間ずつ学生の反応を確認しながら授業を進めざるを得なかった。韓流の影響で特定の俳優や歌手、ドラマに対する知識はあるものの、隣国の人々の日常生活についてはほとんど何も知らない。そんな学生たちの関心を引きつけるためにさまざまなビデオを見せながら授業を進めたので、どちらかと言えば講義形式の授業が多くなってしまった。終了時のアンケートに「みんなと話す時間がもっとあればよかった」という意見があり、次年度の改善点とした。

また、この授業のもう一つのねらいは在日コリアンに対する関心を持ってもらうことであったが、十分な時間が取れず、グループ発表でもこのテーマが選ばれることがなかった。次年度は講師を招くなど、学生たちの在日コリアンに対する関心を深める工夫をしていきたい。

Ⅲ. 教養科目「留学生と日本-異文化を通しての日本理解-」(代表:浮葉正親)

1. 授業のねらい

外国人留学生と日本人学生が討論や協同作業を通じて、両者の日本に対する理解と相互の理解を深めることを目的とする。名古屋大学内およびこの地域で異なる文化を持つ人々が共に学び生きることの意味を考え直し、多文化共生のあり方を模索する。

2. 受講者及び講師

学部生は17名(名大生14, 他大学生3)。受講者(名大生)の学部別内訳は, 文学部2, 法学部2, 経済学部5, 農学部4, 医学部保健学科1であり, そのうち1名が留学生(韓国)であった。他大学生は, 名城大学2, 愛知学院大学1, 計3名。これに10月に渡日した日本語・日本文化研修生9名(韓国2, ウズベキスタン2, 中国1, カンボジア1, スウェーデン1, ハンガリー1, スペイン1), 日韓共同理工系留学生7名, 短期交換留学生5名(台湾3, 中国1, タイ1)を加え, 日本人学生16/留学生22, 計38名が受講した。

平成22(2010)年度は, 浮葉正親(代表), 田中京子, 松浦まち子, 坂野尚美の4名がこの科目を担当した。また, 岩城奈巳が1コマを担当した。授業内容と担当は以下のとおりである。

3. 授業内容

3-1 スケジュール及び担当者

- 10/4 オリエンテーション(1)(全員)
- 10/18 オリエンテーション(2)(全員)
- 10/25 異文化との出逢い(田中)
- 11/1 留学生と日本社会(松浦)
- 11/8 グループ活動について(浮葉)
- 11/15 グループ発表準備(全員)*
- 11/22 グループ発表準備(全員)
- 11/29 グループ発表と討論(全員)
- 12/6 グループ発表と討論(全員)
- 12/13 グループ発表と討論(全員)
- 12/20 グループ活動から学ぶ(坂野),
レポート提出について(浮葉)
- 1/17 留学経験から日本を考える(岩城)
- 1/24 まとめ

*1コマ分(90分)グループによる自主学習を課した

3-2 グループ発表のテーマ

- グループ1: 迷信, 信じますか?
- グループ2: 日本人はなぜ飲ませたがるのか
- グループ3: なぜ日本ではお菓子を沢山食べるのか
- グループ4: 日本人の遊び方
- グループ5: 数字の縁起の由来
- グループ6: 手塚治虫と日本のマンガ・アニメ
- グループ7: ゴミの分別

4. 評価

昨年に引き続き, グループ活動に対する評価を重視し, 全体の40%(発表30%+自己評価10%)とした。その他は, レポート30%, 出席15%, クラス討論への参加度15%(10%は自己評価とした)である。グループ発表に対する評価は, 五つの評価項目を作り, 4名の教員による評価を15%, 他の学生による評価を15%とした。結果的には, どのグループも積極的に発表に取り組み, 24~29%を獲得した。発表のなかにはインタビューやアンケートによる調査の結果をパワーポイントにまとめたグループも多く, 全体に工夫が感じられた。レポートについては, レポートの採点基準や採点方法について再検討しなければならないと感じている。

以下は, 最終日に学生たちが提出したアンケートの自由記述の抜粋である。

★ 留学生と関わる事がほとんどなかったので, すごく新鮮な感じでした。この講義を通して, 海外と日本の文化の違いや共通点などを自分で考える機会を得ました。今まで話したくても留学生と話すのを少し怖がっていてなかなかできませんでした。これからは自分からたくさん話しかけていければと思います。

★ 私は短期留学をしたいのでこの授業を選択した。日本人として外国に行くのだから, 日本って何なんだということも少しでも明らかにしておきたかったからだ。外国と日本の「違い」を見つけるために参加したのだが, いつの間にか外国と日本の「同じところ」ばかりに目がつき, さらに「違い」とは個人差を含んでいることを発見した。何事も一概に決めつけることはできないと感じた。今後, 自分が留学した時もここで学んだ考え方やものの見方を大切にしていきたいと思う。

★ この授業は授業の名前の通り, 留学生と日本を接続するための大切な授業だと思いました。私には日本の社会, 文化, 習慣などを理解するために役立ちました。この授業に参加して面白いと思ったのは, 授業で使われた方法です。例えば, 絵を描いたりゲームをしたりなど, このような方法で勉強するのは面白くて楽しかったです。(留学生)

今年度は, 海外留学担当の岩城准教授に依頼し, 韓国, アメリカ, スウェーデンに短期留学した学部生3名をゲストに迎え, それぞれの留学体験を話し

てもらった。これから留学を考えている学生たちに刺激を与えたようである。来年度も授業に取り入れていきたい。

Ⅳ. 大学院授業「異文化コミュニケーション論a/b」: 国際言語文化研究科 多元文化専攻メディア プロフェッショナルコース (担当教員:田中京子)

2003年度に国際言語文化研究科の授業科目として開講した「異文化接触とコミュニケーション」は、今年度8年目となった。前期と後期とを分けての開講は3年目である。異文化コミュニケーションの理論と実践を核として少人数セミナー形式の授業を進めた。

1. 授業のねらい

母語や背景となる文化が異なる人たちが、意思疎通をはかりながら共に生活しようとする時、どんな創造や衝突があるか、文献購読や経験学習、討論を通して考え学ぶ。

コースの中では、共通言語として主に英語を使用して話し合いや実習を行うことによって、言語能力が様々な人たちの間のコミュニケーションの特徴を実体験し、積極的で公平なコミュニケーションについて考察する。

2. 参加者

前期、後期ともに、国際言語文化研究科・国際開発研究科の大学院生、研究生、聴講生と、国際言語文化研究科のTA、担当教員の約10名で毎回進め、必要に応じて学内外の学習支援者の協力を得た。年齢50歳代から20歳代までの男女、出身は、スリランカ、台湾、中国、マレーシア、ブラジル、パキスタン、日本と様々で、英語と日本語の運用能力も様々、他の協力者がいる時にはさらに多様なメンバーとなった。

3. TA: 国際言語文化研究科 D2 Kanduboda A. P. B さん

TAは異文化コミュニケーション学に以前から興味を持ち、関連の研修を受け、国際キャンプの指導者などを行ってきた大学院生が担当した。毎週授業に参加し、授業後に教員と反省と準備の時間を持ち、レポート添削を補助すると共に、配布資料を提案して作成し

たり、授業の一部の進行役を担ったりした。積極性のあるTAの補助は、授業に活気を与え、非常に有難かった。

4. 授業内容

【前期】

- (1) 異文化間コミュニケーションに関する疑似体験学習と振り返り
- (2) 異文化接触の事例とその考察
- (3) 異文化コミュニケーション理論 (文献購読:宿題)
- (4) 文献についてのレポート (宿題, 英語で執筆)
- (5) 文献についての討論
- (6) 期末レポート (事例解釈)

【後期】

- (1) 異文化コミュニケーション理論まとめ
- (2) 異文化接触の事例とその考察
- (3) 事例作成, 発表, 討論
- (4) 事例解釈のレポート (宿題, 英語で執筆)
- (5) 事例検討論文

英語が使いたいという希望が主な動機で授業を受講した学生複数が、宿題の購読や討議準備に十分な時間がとれず、中途辞退した。授業の目的や趣旨をシラバスに明記すると共に、最初の授業でさらに周知し注意を促すことが必要である。

5. 課題

教員はこれまで行ってきた国際交流関連業務や留学生相談の中で培った異文化コミュニケーションに関する経験や知識を、個別教育(相談)だけでなく授業の中でも生かすべく取り組み、また同時に、この授業を個別教育に還元して相談活動を発展させることも意識している。個別教育と集団教育、教育と研究の接点として、それぞれにさらに深みを持たせるため、このセミナー式授業を大切に考えている。

しかし現在までに発表されている文献の多くは、西欧から見た異文化コミュニケーションを扱うものである。今後、さらに多文化からの視点をいかに学術的に取り入れるか、また文化を本質主義的に捉えがちな傾向を、現実のダイナミックな文化といかに擦り合わせていくかを、課題として考えている。